

# 行川アイランド再生計画

## リゾート施設跡地に作るグランピング風宿泊施設



### 何もしないことをする

リゾート施設の設計では利用者が日常生活では感じることのできない非日常的な空間にすることが重要である。現代社会で生活している人々は常に時間に追われ、四季の変化や何もしないことを楽しめていない。グランピング自体は「なにもしないことをする」を基準として考えられている。いつも肌身離さず持っている携帯電話を置き、頭をリセットしたり絵や字を書いたり本を読むことなど普段できないような過ごし方をすれば時計の針がゆっくりと進むようなひとときが楽しめる。そのため、各施設の空間の作り方や宿泊棟からどのような景色が見えるのかを考えながら設計した



行川アイランドは、1964年に開園し南国系の動物や熱帯植物、プール、ホテル、野外ステージが整備された一大リゾート施設として運営されていた。しかし鴨川シーワールドの開園などの影響から2001年を最後に、営業を停止した。以降使用されないまま放置されていたのだが、2020年には、この土地に新しくホテルが建設される計画がある。



開園当時



放置され廃墟となっている

外部の駐車場からトンネルを使い敷地内に入ると、最初に目に入ってくるのはセンター施設であるエントランスだ。エントランス棟にはラウンジがあり、ラウンジからの景色は海側に開けている。  
 レストランでは宿泊施設に宿泊している人達が外の川などを見ながら食べられるようにした。  
 エントランスから海のほうに歩くと宿泊者が泊まるキャビンがある。  
 キャビンは宿泊エリアは18室で構成されており1部屋につき1つのキャビンを使うようになっている。  
 キャビンは海の景色を楽しむために、すべてのキャビンが海側に向いており海向きの面をガラス張りにした。  
 入り口側より海側のほうが天井が高くなっているため入口から入ってきた宿泊客は景色がより開けて見える。  
 キャビンよりさらに歩くとカフェもあり海岸線に沿って作られており、海側を全面ガラス張りにすることでキャビンよりもさらに近い位置からの風景を楽しみながらドリンクや軽食が楽しめるようになっている。



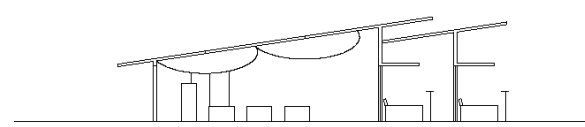
エントランス棟内  
ロビーからラウンジをみた風景



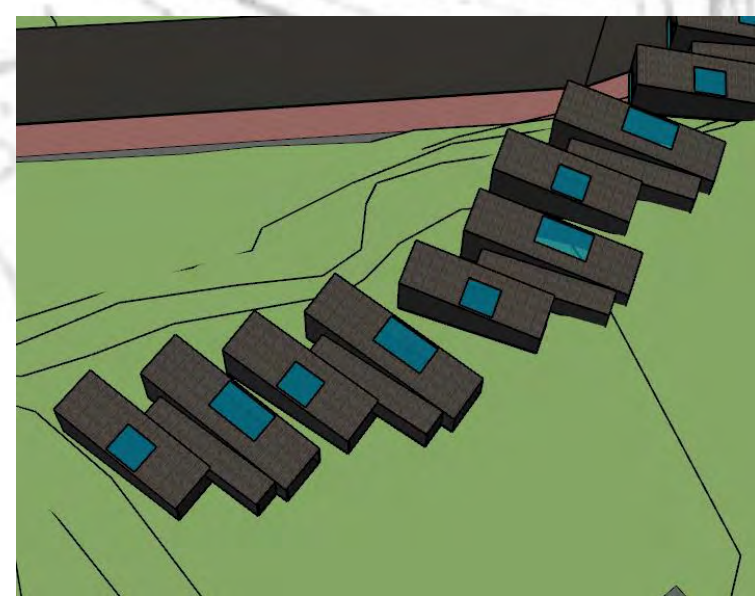
エントランス棟内  
レストランの風景



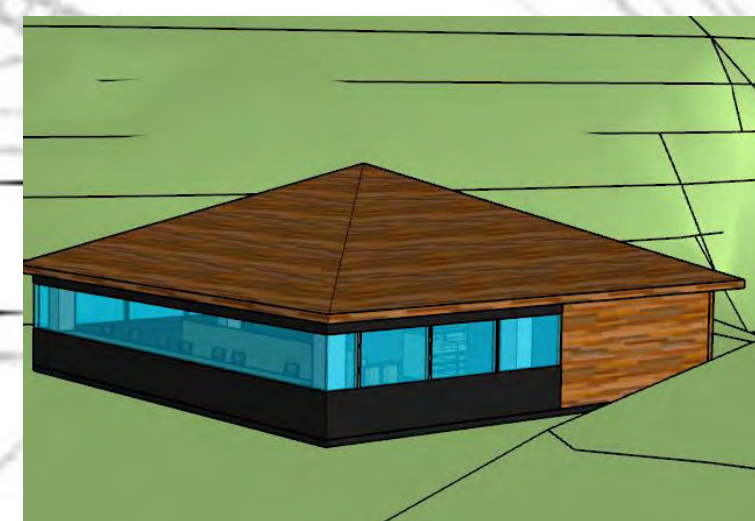
エントランス棟からキャビンに歩いている時に見える風景



キャビン  
断面図



キャビンの天井部を一部がガラス張りにし、内側に布を張ることによりグラビティで使われるテントをイメージした。



カフェ外観



カフェ内では、テーブルに座った人たちにも窓の外の景色が見えるようにパーティションを低くにした